
続・無学な俺と哲学少女～R - 18とお星様

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・無学な俺と哲学少女〜R - 18とお星様

【Nコード】

N87820

【作者名】

キラ

【あらすじ】

まあ、普通のバカな男子高校生と、ちょっと変わった女子高生のラブコメ？みたいなものです。

7月。じめじめした梅雨が明け、ようやく本格的に夏を感じる時期だ。

地球温暖化の影響も年々増し、これからアホみたいに暑くなっていくのかと思うと気が滅入るのは確かだが、高校1年生である俺『木山隆司』には夏休みというスペシャルイベントがあるので問題ない。

……だが、その前に越えなければならない壁がひとつ。

そう、皆さんご存じ『期末試験』だ。これを使い切らなければ楽園にたどり着けない。加えて中間試験でワースト3位だったこの俺の場合、事の次第じゃガチで進級に関わるため、それなりに本気を出さなければならぬのだ。

しかし試しに物理の教科書を見直してみたところ、書いてあることの3割も理解できなかった。これはゆゆしき事態だと踏んだ俺は、急遽助っ人を要請することにした。

幸い、俺の友人には学年ぶつちぎりトップの天才がいる。そいつの名前は高橋玲菜といい、まあ性別上は紛れもなくメスなのだが、女らしさというものが決定的に欠如しているため、俺としては異性と絡んでいるという感覚はない。

何しろあいつときたら……他の女子が話すような会話のネタを持ちだすことなどほとんど皆無で、いつも無学な俺には理解できないような『哲学的』な話題を出してくる。しゃべり方も女っぽくないし、おまけにあいつと学校以外で会ったときはいつもジャージ姿で髪の手入れもされていない。これで女として見るという方が無理だ。顔立ちは整っているのに、そういう面があるせいで男子からもあまり注目されていないというのは、非常に損をしているんじゃないだろうか。

そんな変わり者と俺が何故仲良くなったかというところ、そもそもものきつかけは俺のささいな冗談から始まったのだが……ま、今話すことでもないか。

とにかく、玲菜という人間を異性として見る必要などないわけだ。おそらく向こうもそう思っているはず。

だから、休日に自宅へ誘って勉強を教えてもらおうとしたって、別段問題はない。

たとえば、今日は家族が全員出かけていて、家には俺と玲菜の2人きり、という状況でも、なんら気にすることはないのだ。

そう、どうせいつものジャージ姿のはずなんだから、何の問題もな

い　　そう思っていた。

「さて隆司。私が今持っているものは何だと思っ？」

現在時刻・午後1時半。場所・俺の部屋。そして、にこにこしている玲菜が右手に持っているのは。

「……エロゲーです」

「ではもう1問。私はこれをどこで見つけたと思っ？」

「……俺の部屋です」

「その通り。いやはや、18歳未満である君の部屋にこんなものがあるなんて、不思議なこともあるものだ。ははは………」

「そ、そうだよなー。不思議だよなー。あっははははー………」

楽しそうに笑う玲菜に合わせて笑い声を出しながら、俺はこのまま事態が収まることを切に願っていたのだが

「何かおかしいんだ？」

駄目だ、目が全然笑ってない。しかもやたら声にドスがきいている。

そう……この瞬間、何の問題もなかったはずの勉強会は、絶体絶命の修羅場に変貌してしまったのだった。

「……どうやって見つけたんだ、それ」

玲菜からの圧迫感に耐えながら、俺は当然の疑問を口にする。母さんが勝手に部屋を掃除した時に見つからないように、念入りに隠しておいたはずの人生初のエロゲーが、俺がちょっとトイレに行っていた間にこいつの手に渡ったのが信じられない。

「君と出会って1ヶ月。大体の思考パターンは把握した」

にここに作り笑顔を解いた玲菜は、事もなげにそう答える。肉親ですら見つけれられないものを……なんてヤツだ。

「喜ぶ。辛い時間はたくさんある。たーっぷり、『お話』しようじやないか」

人はそれを尋問という。

くっ……どうする、どうすんだよ俺！

> 18禁のゲームを買っていたのは事実なので、素直に尋問を受け入れるべきではないでしょうか

> ふざけんな。何があっても徹底反抗だ、強気で押しきれ！<

タイミングよく心の中で聞こえてくる天使と悪魔の声。どちらを選ぶべきか……？

「どうした、返事がないぞ？いくら君でも、今の自分の立場くらいはわかるはずだろう」

あ、ちょっとカチンときた。決めたぜ、俺は悪魔と同じ道を進む！

「そっちこそ、ここは俺の家だぞ！しかも俺達以外は誰もいない。ということは、お前をどうしようが俺の勝手なんだぞ！」

勢いに任せて過激なことを口走ったような気もするが、構うもんか。こうなったら何としても

「やれるものならやってみる？」

「すみませんチョーシこいてました」

はい今俺のことへタレだと思ったそこのお前！違っぞ！目だけ笑っていない機械みたいな笑顔を浮かべてあんなセリフ言われたら誰だって恐ろしくて謝らざるを得ないんだからな！

「では『エロゲー』と呼ばれるものについての議論を始めようか」

結局始まる玲菜の尋問。……仕方がない。反抗するのはやめて、何とか空気を和らげるところから始めてみよう。

「隆司。早速だが、君はこの『R-18』という表記の意味は知っているかい？」

いきなり核心を突いてきたな……………だけど、ここでうまく答えられるかどうか勝負だ。

考えて考えて……………よし、これだ。

「え〜と……………涌井秀章？」

「……………」

「…あ、意味わかんなかったか？涌井は埼玉西武『ラ』イオンズの背番号18で……………ってやめて！右の拳を目一杯握りしめて振り上げないで！」

本気でグーで殴ろうとする玲菜。あれ？選択肢ミスった？

「……………次にふざけたら」

「……………ふざけたら？」

何とか右手を止めてくれた玲菜の言葉に、俺は耳を澄ます。

「飛ぶぞ」

「何が!？」

いやいや待つて!?!飛ぶつてどういうことだ、めちゃくちゃ怖いんですけど!

「それとライオンズのスペルは『Lions』だ。Rじゃない。まあそれは置いて、次にエロゲーの主な内容についてだが」

「あっさりスルーすんなよ!」

俺の叫びは完全無視。やはりそれほどまでに怒っているということか……いくら女らしくないといつても、友人の部屋にエロゲーがあったらそれは不快だろう。というか、ついでに間違いを指摘されて俺バカ丸出し状態なんだけど。

「エロゲー、つまりアダルトゲームというものは、性的描写があるために18歳未満の購入および使用が禁止されているゲームだ。わざわざそんなものを18歳未満が購入するということは、余程そういう性的な方面に興味があるのだろうか」

「待て、それは大きな誤解だ。他の奴らは知らんが、少なくとも俺はストーリー目当てで買ったんだ。エロ方面に期待していたわけじゃない」

「……ほう」

俺の言葉にやっとまともな反応を返してきた玲菜。よし、このまま話を続けるぞ。

「できればコンシューマ版の18禁じゃないやつを買いたかったんだけど…残念ながら俺の欲しかったゲームは18禁版しかなかったんだよ。それだけなんだ。決してやましい理由があったわけでは…」

「……なるほど。確かに、アダルトゲームの中にはまともなストーリーがあるものもあって、しかもなかなかいい話だ、というのはたまに聞くな」

おお、小さく頷いたぞ！これはひよつとしていける？

「では、試しにこのゲームを起動してみるとしよう」

……お、落ち着け俺。これはフェイクだ。いくら玲菜でも、男の
見てる前でエロゲーをプレイするなんてことはできないはずだ。こ
っちが焦ってボロを出すのを誘っているにすぎない。そう、緊張し
て妙なことを口走ったりしない限り

「ははは、起動したって何もつかめやしなぞ。エロシートの直前
のところでセーブしまくってるなんてことは断じてないんだから…
……あ
「あ

ゴゴゴゴゴゴ……（ 玲菜の怒りのオーラが満ち溢れる音

おめでとう！レナは アシユラに しんかした！

って俺のバカーー！！？ちゃっかり焦ってボロ出してんじゃねー
かよー！！

「……………ふふ」

あ、あれ？玲菜さん？なんだか不気味な笑い声が出てるけど大丈夫
ですかー？

「ふふふふふ……………」

「ちよっ！どこから取り出したんだそのピコピコハンマー！？やめる、それ音はコミカルだけど結構痛いんだぞ！」

ヤバい。このままだと最悪のバッドエンドに向かってしまう。何とか、何とかこの場を凌ぐ方法は……………

「そ、そうだ！勉強だよ勉強。期末まで時間がないんだ。真面目にやるから、ここはどうか許して勉強教えてください」

もはややけくそで放った言葉だったが、それを聞いた途端玲菜の動きが止まる。

しばしの沈黙の後、やがて玲菜はピコピコハンマーをしまい、

「…仕方がない。じゃあ、英語でもやるうか」

驚くべき、そしてずっと待っていたセリフを言ってくれた。

本当に良かった。えらくあっさり引いてくれたのが気にかかるが、あいつの怒りの爆発を喰らわなかったという事実だけで、今は万々歳だ。

「今から私が英文を言うから、君はそれを日本語に訳してくれ。辞書や教科書を使っても構わない」

「アイアイサー」

よし、辞書と教科書があるなら何とかなるはず。どんと来い！

「He is a first-year student at high school」

「え、彼は高校1年生だ」

「正解。まあこれはウォーミングアップだ」

よし、とりあえず1問正解だ。∴ もっとも、今の文章は中1レベルだけだ。

「He committed the big fault」

∴ っと、もつわからない単語が出てきたぞ。仕方がない、辞書を使

うか。

「『彼は大きな過ちを犯してしまった』」

「正解」

オツケー、2問目も突破だ。今引いた単語はチェックしておこう。

さあ、次の文章は

「He played the videogame forbidden law」

……またわからん単語が出てきたな。とりあえず辞書を引いて、俺は和訳の文章を口にする。

「『彼は法律で禁止されたテレビゲームをしてしまった』……ええ？」

あれ？ついさっきどっかで聞いた話のような……？というか、いつの間にか玲菜の顔が不気味に歪んでいるのがすっげー怖いんですが……

「It is not allowed」

「……『これは許されないことだ』」

「He must reflect on it very much, and toilet seat cover」

「『彼は大いにそれを反省しなければならない……それと便座カバー』」

「It should greatly be ashamed, and toilet seat cover」

「『大いに恥じ入るべきだ……それと便座カバー』」

「He is a human being like garbage, and toilet seat cover」

「『彼はごみのような人間だ、それと便座カバー』」

「つてもう嫌じゃー！！！」

心が我慢の限界に達した俺は、辞書を床にたたきつけて叫ぶ。

「何この文章！？明らかにただの嫌がらせだよな！つかなんで2、3文前から余計な語尾がくっついてんだよ！？」

「いや、面白いかと思って」

「面白くねえよ！？」

『スカート』の裾を整えながらさも当然かのように返してくる玲菜に、俺は魂のツツコミを入れる。いや、確かに元ネタは傑作だけどさ、ここで使われても俺の心がハートブレイクされるだけなんですけどー！

「てかなんでお前はそのネタ知ってたんだ！」

「だって気になるじゃないか。ひとりの人間に『人生』とまで称されるゲームがあるなんて。だからアニメ版を視聴した。岡崎最高」

…ああ、そうだったな。こいつは好奇心の趣くままに動く人間なん

だった。たとえギャルゲーが原作のアニメをみてもなんら不思議はないのだ。

「じゃあ、和訳問題を続けるぞ」

「もつやる気なんてかけらもねえんだけど」

「そう言うな。次で最後だから」

「……………わーったよ」

俺の劣勢に変わりはないわけだし、後1問付き合っつて玲菜の機嫌が直るかもしれないのなら別にいいか。どんな罵倒が来てもいいように、心の準備をしておこう。

「He does not have delicacy. Although his friend has made up her mind and has dressed up, he cannot say any considered words. Do you have something to say?」

……………長いな。心が傷つくような文章だっつてことがわかってるのに、

わざわざ自分で訳すなんてアホらしいことこの上ない。やって悲しくなってくる。なになに、considerateは『気が利いた』って形容詞か……………

だが、辞書と教科書を持って少しずつ訳していくうちに、俺はあることに気づいた。

この文章、まさか……………？

はっとして玲菜の方を見ると、彼女は妙にそわそわしながら、『手入れされた』長い髪をいじっている。

疑念が予想に変わり、そして。

文章を訳し終わったとき、それは確信へと到達した。

彼にはデリカシーがない。友達が意を決しておしゃれをしてきたのに、気の利いた言葉のひとつも言えない。何か言うことはないのか？

……………なんてこった。英語越しにあいつの気持ちを理解した俺は、そう感じざるを得なかった。

そう。今の玲菜の服装は、いつもの濃い赤色のジャージではない。

髪はきちんと整えられ、上半身は清潔感のある白い服、下半身は薄い水色を基調とした少し短めのスカートを身に纏っている。

つまるどころ、『普通の』女子がする格好なのだ。

もちろん、今の今までそれに気づいていなかったわけじゃない。ただ、玄関で出迎えた時に目に入ったその服装にあまりに驚いたため、何と言えよいものか悩んでいたのだ。だってそうだろ？今までおしゃれなんてものに全く関心がなかったやつが、いきなり女らしい服を着て家に来たんだぜ？

そんなこんなで、玲菜の服に関して触れる前にエロゲーが見つかり、そのまま今にまで至っているわけなので、何も言えていないのはある意味当然のことなのだ。

「……………」

無言で、ただじーつと俺の方を見つめる玲菜。……こうなった以上、多少気恥かしくても感想を言わないわけにはいかないだろう。

「……そ、その……似合ってるぞ、その服。……可愛い」

目を逸らしながらも何とか言いきったその言葉を、玲菜はゆっくりとかみしめるようにうなずいて、

「……よろしい」

にっこりと、邪気のない顔で笑った。

……ひよっとすると、こいつはエロゲーのことはとつくに許していて、俺に服の感想を言わせたいがために怒ったようなふりをしていたのかもしれない。

そうだとしたら、とんだ遠回りだ。俺がその言葉を言えなかったのは、玲菜が怒っていたことが理由のひとつなのだから。

大体、そのせいで俺は必要以上に面倒なことをしなくちゃならなくなっただんじゃないか。まったくあいつは

「ふふ………」

……けど、まあいいか。何故だか知らないけど、あいつのああいう笑顔見ると、俺もうれいし。

「今日はサンキューな。おかげで期末試験は何とかなりそうだ」

「そうか、それはよかった。私も君に留年されるのは困る」

時刻は午後8時。あのは普通に通に勉強を教えてもらった俺は、玲菜を家まで送ろうと一緒に夜道を歩いている。最近は何物騒だし、何かあったらちゃんと守ってやらないとな。

「……………」

「……………」

心なしか、いつもより無言の時間が多し気がする。

いや、というより、俺がいつもより沈黙を意識してしまっているようだ。

もともと、玲菜は素材だけ見れば全く悪くない、むしろかなり美人の部類に入る人間だ。そんなやつが人並におしゃれなんかしているせいで、俺としては意識せずにはいられない。今、こいつと並んで歩いていて初めて『女子と歩いている』という認識がはっきり出てきたのだ。

そういうわけで、何だか変な心地だ。なので、何か話題を出してそれを紛らわさなければ。

「……………星がきれいだな」

「ん？…ああ、そうだな。冬の透き通った夜空も素晴らしいが、夏の空もいいものだ」

広大な夜空を見上げながら、俺達は一步一步足を進めていく。

「…そうだ。隆司、君にひとつ星に関する話をしよう」

そんな折、玲菜の哲学的な話が始まった。今日は色々教えてもらって世話になったから、真面目に聞いてやるか。

「ブラックジャックの『六等星』という話を知っているかい？」

いつもわけのわからないところから始まるこいつの議論だが、意外にも今回は俺も読んだことのある超有名漫画のネタから始まった。

「ああ、知ってる。あれだ、六等星みたいに目立たない病院の先生の話だろ。確か……松茸先生だったっけか？」

「六等星にしては随分高級そうな名前だな………椎茸先生だよ」

「…あ、そうだったな」

名前は間違えたものの、話の内容はちゃんと覚えている。腕はあるけど目立たない椎茸先生。彼が働いている病院で院長選挙が行われるも、候補者の2人がともに汚職事件を起こし、逮捕されてしまう。

病院が柱を失った折に大火傷を負った患者が運ばれてきて、そして今まで執刀医を行ったことのなかった椎茸先生が完璧な手術をやったのけて、みんなから評価される、という感じだったと思う。

「あの話を読んで考えたことがある。一等星と六等星。なるとしたら、どちらの方がいいのだろうか、とね。君はどう思う？」

なるほど、そういう質問か。…うーん、どっちがいいかと聞かれると………？

「三等星くらいがいいんじゃない？目立ち過ぎるのも嫌だし、かといって影薄いのもなあ」

「……ふむ。問題の指示に反してはいるが、君らしい答えだな」

俺の反則気味の答えを聞いて、玲菜は顎に手を当てて考え込む。

「私自身は、まだ答えを出せていない。君の言うとおり、一等星のように明るく輝き過ぎるのも問題があるだろうし、六等星のように暗すぎるのも味気ない。だが、だからといって真ん中を取ればいいという話なのだろうか？」

思考の海に入り込み、玲菜はぼーっと路地を歩いて行く。今歩いて

いる道は結構狭く、車が来たらちゃんと端に避けないとぶつかってしまいそう

などと考えていると、本当に向こうから車がやってきた。俺達が見えていないのか、結構なスピードを出てる……って、玲菜のやつ考え込んでて気づいてないぞ!?

「おい玲菜、こっち寄れ!」

「ほえっ……?」

急いで玲菜をこちらに引き寄せる。その直後、車は速度を落とさずに走り去っていった。

「まったく、なんだあの車……っ!??」

車に文句を言おうとしたその時、俺は現在の状況に気づく。

急いで玲菜を引き寄せたということは、今玲菜は俺と抱き合っているように密着している。

彼女の胸の決して小さくない柔らかかなふくらみが、俺の体に当たっ

ている感触が伝わってきて。

「うわわっ!」

反射的に後ずさりして玲菜から離れる。危ない危ない、セクハラになるどころだった。

「…………あれ、玲菜?」

ところが、玲菜がいつまでたっても動かない。心配になって声をかけた途端、びくっ!と跳び上がり、

「にゃっ!?!あ、ああ、だいじょぶ、問題ない。…そ、そうそう、りよくとうせいの話だったかにゃー」

驚くほどかみかみのセリフを言い放った。やけに顔が赤いし、やっぱり向こうも俺と同じく恥ずかしかったようだ。

「あの、めっちゃくちやかんでるけど大丈夫か」

「う、う、うん……」

そう言つと、玲菜はそつぱを向いてしまう。

「……もうここまででいいぞ。私の家はすぐそこだ」

「え？別にすぐそこなら家の前まで」

「いいんだ」

俺の提案をはねのけ、玲菜は夜道を走り出す。

だけど、5メートルほど行ったところで立ち止まると、俺の方を振り向いた。

「隆司！」

玲菜が声を張り上げる。

「私は、他の誰でもない、たったひとりにとっての誰よりも明るい一等星になりたい！」

そう言った時の、夜風になびくあいつの髪と、月の光に照らされた
その姿は、マジで綺麗だった。

(後書き)

いかがだったでしょうか？よろしければ、感想などいただけるととてもうれしいです。
では、また機会があれば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782o/>

続・無学な俺と哲学少女～R - 18とお星様

2010年11月14日02時34分発行